

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720059

研究課題名(和文) 障害者の芸術表現における「美学」の成立過程に関する研究 障害学の視点から

研究課題名(英文) Researching "Aesthetics" in Disability Arts: A Disability Studies Perspective

研究代表者

高田 みわ子(田中みわ子)(TAKATA, Miwako)

筑波大学・外国語センター・特任研究員

研究者番号：10581093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、障害者アートの実践において、芸術表現の「美学」がどのように創出・形成されているのかを、米国での実地調査(2012年9月)をふまえて考察したものである。それにより、障害者の芸術表現において形成される美学が、従来の「障害」の文化的表象や身体イメージを変容させるものとして立ち現れつつあることを示し、そのような美学を提示する場として、障害学および障害者アートの実践が重要な役割を果たしていることを明らかにした。その内容を障害学会、アートミーツケア学会、国際発達障害会議において発表した。

研究成果の概要(英文)：This research explores the process in which the "aesthetics" of artistic expressions by disabled people have been created and formulated in disability arts practices. Based on field works in the USA (September 2012), this research shows that the "aesthetics" emerges as a medium to transform the traditional representations of disability and the body images. Disability studies and disability arts practices assume a significant role as fields where such aesthetics are generated. The research results are presented at the conferences of the Japan Society for Disability Studies, the "Arts Meets Care," and the International Association for the Scientific Study of Intellectual Disabilities (IASSID).

研究分野：障害学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：障害学 障害者アート ディスアビリティ・アート 身体 芸術表現 パフォーマンス

### 1. 研究開始当初の背景

障害を社会、文化の視点から捉える障害学は、現在の障害に関する研究や社会的取組みに大きな転換をもたらしている。こうした変化の背景には、障害学が主張し続けてきた「社会モデル」障害(ディスアビリティ)とは、個人の心身機能の問題(インペアメント)ではなく、特定の個人あるいは集団に不利益をもたらすような「社会」の問題であるとする認識枠組みの重要性が、障害学の分野を超えて広く認められてきたことがある。しかしながら、障害学の内部からは、この「社会モデル」の問題点を指摘する声もある。とりわけ、さまざまな活動上の困難や社会的抑圧を経験する身体の問題、すなわち身体的経験が無視されてきたという批判がなされてきた。

こうした批判を受けて、障害学において「身体」を主題とする研究が、主に障害の文化的表象を研究対象として、英米を中心になされてきている。文化的表象の研究は、社会的・文化的言説や権力作用によって、いかに障害を経験する身体が否定的なものとして意味づけられてきたのかを明らかにしてきた。そこから浮かび上がってきた新たな問題点は、否定的な文化的表象が、いわば個々の身体的経験にも否定的に機能してしまうということである。つまり、文化的表象のイメージによって、みずからのイメージや人生の経験を否定的に捉えてしまうという問題である。

このような障害学の学術的背景から、既存の障害イメージや文化的価値観を攪乱する原動力として「障害者アート」が、学術的にも実践的にも重要視されてきている。ここで注目されるのは、「障害者アート」がもたらす2つの「美学」である。まず、否定的に意味づけられてきた障害者の表現を積極的なものとして捉えていくという点で、「当事者の美意識」という意味での美学がある。そして、障害者アートが、障害の表象イメージや文化的価値観の形成にきわめて重要な役割を果たしていると考えられることから、「文化的表象における美」への効果も期待される。日本においても既に、倉本智明編著『手招くフリーク』(2010、明石書店)が「文化と表現の障害学」を副題として刊行されており、障害者アートや文化的表象に関する研究や実践の重要性が今後増していくことも予測され、障害学の視点に基づいた障害者アートの研究をさらに充実させていく必要があると考えられる。

申請者はこれまで、日本、イギリス、ベルギーにおける障害者アートの実践のありようを調査・研究してきたが、その結果、障害者アートの実践の場で生み出される芸術表現は、障害のある身体に対する否定的な意味づけを積極的なものとして変容させていくという点において、従来の文化的表象に対しても効果をもつことが検証された。こうした

観点から、障害者アートの実践において提示されている「美学」がどのように障害のある人々自身の美意識から生まれているのかを、障害学の視点からさらに具体的に探究することが課題として導き出されている。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、障害者アートの実践において、芸術表現の「美学」がどのように創出・形成されているのかについて実証的に調査分析を行い、それにより、(1)障害学の視点に基づいた障害者アート研究の基盤を確立すること、(2)障害者の芸術表現において形成される美学が、従来の「障害」の文化的表象や身体イメージを変容させるものとして立ち現れつつあることを示し、そのような美学を創出・形成する場として、障害学および障害者アートの実践が重要な役割を果たしていることを明らかにする明らかにすることである。

本研究の試みは、これまで主に美術史、病跡学、心理学、社会福祉の分野の対象とみなされてきた障害者アートの取組みを、障害学の視点に基づきながら再検証することを目指すものである。

### 3. 研究の方法

(1)まず、障害学における先行研究の検討を行い、障害者の芸術表現の中でも主に米国の障害者アートの実践における絵画、ダンス、演劇などのプロジェクトに研究の範囲を限定した。それにより、複数のプロジェクトの中から表現形式を析出し、障害学の視点に基づいた「美学」の成立過程を分析することとした。

(2)米国における障害者アート(ディスアビリティ・アート)の実態を把握するため、ミシガン大学、シカゴ大学に赴き、米国の障害者アートの取組みに関する資料を収集するとともに、研究者、アーティスト、関係者に聞き取り調査を実施した(2012年9月)。ミシガン大学のペトラ・キュッパース(Petra Kupperts)を中心とするプロジェクトの写真やビデオダンスによる身体表現に焦点を当てたほか、ニューヨーク在住のローラ・ファーガソンの絵画についても情報の収集を行った。

(3)上記の資料収集・調査をもとに、障害者アートの実践者がみずからの芸術表現の「美」をどこに見いだしているのか、それは従来の芸術表現への意味づけとどのように異なっているのか、という観点から分析を行った。

(4)さらに障害者アートにおける「美学」を、「即興性」の観点から究明することを目指す。コントロールされ、予測可能な「美」とは異なる美のありようが文化的価値観の

変容にもたらす効果について日本の事例も取り上げて考察を行った。

(5) 研究結果を学会発表や論文として報告する過程で、障害者アートの実践者や関連する研究者との意見交換を行い、得られた知見の検証と共有を図った。

#### 4. 研究成果

本研究の主な成果として以下の3点を挙げることができる。

(1) アメリカのディスアビリティ・アートの実践のなかから、ダンス、詩、コミュニティ・アートなどの活動家であり研究者でもあるペトラ・キュッパースを中心とする『テイレシアス』(2007)のプロジェクトおよびビデオダンスに焦点を当て、聞き取り調査を踏まえた考察を行った。『テイレシアス』のビデオダンスは、キュッパースとサディ・ウィルコックス(Sadie Wilcox)の監修により制作された7分30秒の、ストーリーのない映像作品である。

テイレシアス・プロジェクトは、アメリカのミシガン州、ロードアイランド州、カリフォルニア州でのワークショップや、参加者たちのリストサーブ上のディスカッション、写真や執筆活動などを含む一連の実践であり、自分たちの経験、とりわけ障害の経験について省察することを目的としたものであった。ミシガン大学の学生やアナーバーの自立生活センターの人々とのコミュニティ・パフォーマンスなど、不特定の参加者にも開かれたものである。一般に、コミュニティ・アートはしばしば結果としての作品よりも、共同制作そのもののプロセスを重視したものであることが見受けられるが、このプロジェクトもまた、そのプロセス自体に焦点を当てたものである。

ビデオダンスの表現形式の主な特徴としては、以下の2点を指摘することができる。第1に、カメラワークによって身体を取り巻く空間の秩序が攪乱されている点である。第2に、ビデオダンスに挿入されている詩の言語が、文字と音声の組み合わせによって観る者の感覚を過剰に喚起している点である。これらの特徴は、個々の観客が多様な仕方でもビデオダンスを鑑賞することを可能にしている。

考察にあたり、身体のパフォーマンスのありようを実践に即して明らかにしつつ、それがどのような表現形式や文化を生み出しているのか、そこにはどのような障害の経験がみられるのか、ひとつの検証を試みた。キュッパースの「私的な身体と公的な物語はパフォーマンスにおいて出会う」という言葉に示唆を得ながら、障害のある「私的な身体」と「公的な物語」がパフォーマンスにおいてどのように出会うのかを、『テイレシアス』の二人の身体のパフォーマンスを事例として

分析した。そしてその出会いがどのような出来事なのかを描き出すことによって、「公的な物語」がどのように変容するのか、物語の変容する契機を探った。

本研究では、二人の身体のパフォーマンスを、ビデオダンスの中で印象的に繰り返される「What happened to you?」という問いかけに対する応答として捉えた。この問いかけは、障害のある人に対して「公的な物語」を語ることを求めるものである。けれども、彼らの身体のパフォーマンスは、「公的な物語」を語るのではなく、むしろ、「公的な物語」に「裂け目」を入れ、そこに身体文化の生まれる土壌と可能性を示していると考えられた。

身体のパフォーマンスに焦点を当てた本研究は、障害のある身体の実験とディスアビリティの相互作用を具体的な実践に即して考察するものであり、そこで提示される「美」のありようは、無力化する社会の構造を明らかにしつつ、そうした構造そのものに働きかけていることが明らかになった。この成果については、学会発表(障害学会)として中間的な報告を行ったほか、現時点で雑誌論文(『障害学研究』第10号)への掲載が確定している。

(2) ニューヨークの画家であるローラ・ファーガソンの絵画作品を事例として、脊椎側湾症により脊椎の歪みがあるファーガソンが、自らの身体をどのように描き出しているのか、そこにはどのような「美」がみられるのかを探究した。ここではとくに、ファーガソンが自らの痛みをどのようにとらえ、他者との関係をどのように見出しているのかをみていくことによって、ファーガソンの提示している美学をたどった。

*Visible Skeleton Series* (1994-2004)には、脊椎側湾症により脊椎の歪みがある、ファーガソン自身の身体が描き出されている。ファーガソンが自らの身体を描くことは、自らの美と痛みの感覚を視覚化する試みだと捉えることができる。このようなファーガソンの作品は、様々な障害や痛みを抱える人々だけでなく、医療関係者たちの関心をも惹きつけてきた。作品に描かれているファーガソン自身の骨は、X線写真に基づいて描かれたものであり、医学的な眼差しに「生と感情」を織り込み、医学的な眼差しを拡張した身体イメージを創り出している。さらに、X線写真のイメージに、自らの生体構造の美しさを見出し、彼女自身が感じるその複雑で繊細な美を描き出している。その美の中に、ファーガソンは自らの痛みの感覚をも描き出している。

ファーガソンは自らの痛みを、それ自体が「自己 他者」の二重性を持ち、自己の内部に「他なるもの」を創造するものと捉えており、その「他なるもの」に「人格 persona」を与えている。ここに、わたしの内部にあり

つつわたしから離れている痛み、そして「自己 他者」の二重性のその距離に、骨に触れ、他者に触れ、外部世界に触れることの同時性と、自らの身体の痛みに触れつつ触れられ、他者の身体に触れつつ触れられる経験の重なりをみる事ができる。そのような痛みの感覚を描き出すファーガソンの眼差しと鑑賞者の眼差しは、互いに補い合い、その描かれた身体が表現する世界を共有しようとすると捉えられた。

そこで本研究では、アメリカの哲学者ドルー・リーダーの「共主観性」および「ディス=アピアランス (dys-appearance)」の概念を援用しながら、ファーガソンが描き出した美と痛みの感覚がどのように鑑賞者の共感へと開かれていくのかを考察した。ファーガソンの描いた身体は、鑑賞者との間にひとつの共有される場を創り出しており、そこに、アメリカの哲学者ドルー・リーダーのいう「共主観性」を見出すことができる。けれどもこの「共主観性」は、痛みという身体の脆弱性によって「裂け目」を生じることにもなる。「共主観性」が裂け目によって分断されるその絶対的な孤立の中で、身体の脆弱性が共感を生み出すことを本研究では「痛みの共同性」と呼び、共感が実現されなかった事例をも取り上げつつ、ファーガソンの描いた痛みが「想像力」を介して共感を生むということを示した。そうした共感がケアへの可能性となることを、アートミーツケア学会で報告した。

さらに「ディス=アピアランス」の概念をふまえて、痛みに対する2つの眼差し(ソクラテス的な一人称のパースペクティブとデカルト的な三人称のパースペクティブ)をファーガソンの作品に追究した。この2つの眼差しが聞き合う場に、ファーガソンは痛みを他者との関係性として描き出している。そして、ファーガソンと鑑賞者の眼差しが重なり合うところに、アートを介した痛みへの共感可能性を見出すことができる。本研究の成果は、研究論文として『アートミーツケア』第5号に掲載されている。

(3) 上記の研究成果から得られた「美学」の成立過程を「即興性」の観点から追究した。米国の事例を参照しつつ、それとは異なる美の生成プロセスを、日本のNPO法人である自然生クラブのパフォーマンスに探った。

この成果を、第3回アジア・太平洋発達障害会議のシンポジウム“Quality of Life through the Arts for People with Intellectual Disabilities”において報告し、研究者や実践者と意見交換を行った。このシンポジウムは、イギリスの研究者であるニコラ・グローブ氏が中心となって企画した日本の障害者アートの実践者との共同セッションであり、自然生クラブの柳瀬敬氏の参加により実現した。

シンポジウムでは、自然生クラブの芸術実

践にみられる「即興性」が日常的な身振りのなかから生み出されていること、そのようにして生み出される身体の表現は、互いに同調する身体のリズムとばらばらに異なるリズムとが重なり合うことによって、他者との関係性に開かれていること、そうした自然生クラブの人々の表現にみられる多層的な関係性は、パフォーマーたちの「主観」でも観客の「客観」でもなく、その「あいだ」に生じていることを論じた。自然生クラブの実践は、このような即興性から生まれる「美学」を提示するものであり、そうした「共にある身体」において表現が立ち上げるコミュニティの様相を示唆している。こうしたコミュニティの様相については、今後も具体的に研究を深めていく課題となった。

本研究は、障害学の視点に基づいたディスアビリティ・アート研究の視座を獲得し、社会的文化的規範や価値観に対してディスアビリティ・アートがもつ多義的な意義を捉えることを可能とするものである。得られた成果の国内外における位置づけとインパクトについては、日本国内においては、これまで障害学の視点からなされた障害者アートの研究は、基礎的な資料、研究論文ともに乏しい状態にあり、本研究は、今後の障害学における障害者アート研究に向けた基礎的な資料を提供するものである。

上記の通り、本研究を通してアメリカ、イギリス、日本の障害者アートの実践者、研究者、関係者と意見交換の機会をもち、多くの貴重な情報や示唆を得ることができたことは申請者にとって大きな収穫であった。本研究を、日本の障害学における文化・芸術研究や実践に接続・発展させていくうえでも、できるだけ多くの交流や対話を深めていくことが今後も必要不可欠であると認識している。

今後の展望としては、文化・芸術研究の立場から、障害の「美学」の系譜をたどることで障害学にひとつの視座を提示することができると考えており、今後も研究を深めていく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

田中みわ子、「ディスアビリティ・アートの実践にみるパフォーマンスの身体」、『障害学研究』、査読有、第10号、2014年、掲載決定。

田中みわ子、「痛みへの眼差しから共感へ ローラ・ファーガソンの描く身体を事例として」、『アートミーツケア』、査読有、第5号、2013年、pp.37-53、URL: <http://popo.or.jp/artmeetscare/journal/2013/11/post.html>

TANAKA Miwako, "Visualizing Beauty and Pain in Laura Ferguson's Visible Skelton Series," 『外国語教育論集』, 査読有, 第35号, 2013年, pp.29-42

〔学会発表〕(計3件)

TANAKA Miwako, "The Disabled Body in Performance," IASSIDD Asia-Pacific Regional Congress, 2013年8月23日、早稲田大学。

田中みわ子、「痛みから共感へ ローラ・ファーガソンの描く身体」, アートミーツケア学会、2012年12月16日、愛媛大学。

田中みわ子、「身体のパフォーマンスと意味空間」, 障害学会、2012年10月27-28日、神戸大学。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高田 みわ子 (TAKATA, Miwako)

(田中 みわ子)

筑波大学・外国語センター・特任研究員

研究者番号：10581093